

家原遺跡のあらし

宍粟市教育委員会

はじめに

家原遺跡は、宍粟市一宮町北部の中心地である三方盆地を一望におさめることのできる台地の上に営まれています。ここにはじめて遺跡調査のメスが入れられたのは、平成4・5年のことでした。この時の調査では、台地のほぼ全体にわたって集落跡が存在することが明らかになり、縄文時代から鎌倉時代にいたる数多くの住居跡などが確認されています。とくに、各時代に築かれた建物跡の存在は、揖保川の上流域のみならず、広く播磨地方における住居の形態や集落の構造をあとづける上で、きわめて貴重な成果であるといえます。

一宮町では、地元を初め関係者の方々のご理解とご協力を得て、この貴重な遺跡を郷土の歴史文化の教育の場として後世に残し、さらには地域づくりの拠点とするための遺跡公園事業に取り組んできました。

●縄文時代（1,000年前～2,300年前ごろ）

縄文時代にはまだ稲の栽培を行っておらず、山や野の植物や動物・川魚などを食料としていました。土器を使って煮炊きするようになりましたが、道具の多くは石や木で作ったものです。家原遺跡では、竪穴住居跡1棟と落とし穴が30基ほど確認されています。竪穴住居跡は、一辺が6m前後の隅が丸い四角形で、床面の中央に1m×90cmほどの石囲いの炉が設けられ、この炉をはさむようにして2本の柱穴があります。住居跡の中からは、4,000～4,500年ほど前の土器や石器（石鏃・石錘・凹石など）が出土しています。家原遺跡の周辺では、森添や福野でも同じ時期の竪穴住居跡が見つかっています。落とし穴は、直径90cm×1.3m、深さ1.2mほどの楕円形で、底にはいずれも直径10cmほどの穴が掘られています。ここに先を尖らせた杭を立てて、落ち込んだイノシシやシカなどの動物を捕まえていたものと見られます。

●弥生時代（2,300年前～1,800年前ごろ）

弥生時代になると、中国大陸あるいは朝鮮半島から稲作りの技術が伝えられました。鉄や銅などの金属の道具を使い始めるようになったのもこの時代からです。家原遺跡の弥生時代のものとしては、竪穴住居跡がこれまでに30棟ほど確認されています。床面の形はいずれも円形で、直径は5mほどのものから10mを超える大型のものもあります。中には、同じ場所で2～3度建て替えられているものもあります。柱の数も住居の大きさに合わせて4本～6本と増えています。大型の住居は、村をおさめた指導者の家かあるいは村の集会所のような役割を持っていたものと思われ、指導者を中心とした村の秩序が保たれていたことが想像されます。各住居跡からはたくさんの土器や石器・砥石・鉄斧などが出土しています。中には但馬地方や瀬戸内地方との交流を示す土器もあります。

●古墳時代（1,700年前～1,300年前ごろ）

弥生時代以降、各村や地域をおさめていた首長らが自らの権威や経済力を村の内外に示すために大きな盛り土をした墓を築くようになりました。これが古墳と呼ばれるものです。一宮町内では、鏡や鉄剣などが見つかった前方後円墳の『伊和中山古墳』が築かれています。家原遺跡では竪穴住居跡がこれまでに100棟以上も確認されており、当時の繁栄ぶりを物語っています。100棟以上が同時に建っていたわけではありませんが、それでも村の人口は数百人にのぼっていたと推定されます。住居の床の形はいずれも四角形で、大きさは一辺が3m～7mほどのものが大半を占めています。床面が固く叩き締められたものが多く、中には石を組んだ炉や土器を再利用した炉、カマドを造りつけたものもあります。さらに、家原遺跡とは川をはさんだ東方の井の田と宇奈手の山麓には古墳が築かれており、家原遺跡の有力な一族の墓であるとみられます。

●奈良時代～平安時代（1,300年前～800年前ごろ）

中国から法律制度が導入され、大和国に藤原京や平城京という都が置かれた時代を奈良時代、山城国に長岡京・平安京という都が置かれた時代を平安時代といいます。地方には、国・郡・里（のちに郷）が置かれ、現在の地方行政の基礎が築かれます。家原遺跡では日常生活に使用した土器などを廃棄した大きな穴がいくつか見つかっています。中からは須恵器や土師器と呼ばれる多量の土器や、硯に再利用した土器、瀬戸内地方から塩を入れて持ち運ばれた土器、鉄の小刀などが出土しています。建物跡についてははっきりしていませんが、多量の土器から見て周辺に相当な規模と数の建物が建てられていたことは間違いありません。また、奈良時代には『播磨国風土記』という書物が残されており、宍粟郡（現在の宍粟市）御方里という地名が記されています。さらに奈良の都からは、三方里から大豆五斗を納めたときの木簡（荷札）が見つかっています。家原遺跡には、三方里をおさめる役所が置かれていたものと思われる

●鎌倉時代（800年前～700年前ごろ）

平氏や源氏に代表されるような武士が勢力を伸ばし、中央政治を行い地方をおさめた戦乱の時代です。家原遺跡では、掘立柱の建物や墓跡などがみつかっています。建物で最大のものは桁行き6間・梁間5間で、牛馬を飼っていたとみられる土間を備えています。また、中心となる建物は中門と呼ばれる廊下状の出入口を設けています。墓はいずれも木の棺を納めたもので、中国から輸入された青磁の碗や白磁の皿、小刀などが供えてありました。先の建物に住んでいた有力武士の墓と思われる。家原には「莊原」という別名があり、京都市山科区にある随心院というお寺に伝わる古文書に見える「三方庄」という荘園が置かれていました。家原に営まれた建物は、三方庄をおさめる莊官（現地役人）の関係する施設であったと思われる。

宍粟市歴史資料館 — しろうし れきしりょうかん —

〒671-4113 兵庫県宍粟市一宮町三方町 633
TEL 0790(74)8855 FAX 0790(74)8080